

2位に8打差の圧勝

2部制以降、最大差の初V

《第45回九州ジュニア選手権競技》

女子の部 15～17歳

～湯布高原ゴルフクラブ

通算5アンダー 139

廣吉 優梨菜（福岡第一高2年）



圧勝、異次元、さすがナショナルチームメンバーの実力をイヤというほど湯布院の地に刻み込んだ。唯一人アンダーパーの139。2位に8打差は2009年に15～17歳と12～14歳の部に分かれて以降、最大の差となった。「めっちゃ嬉しいですよ。優勝するのは難しいですから」と静かに喜ぶ中に勝者のプライドも見え隠れする。

とにかく強かった。初日は6バーディー、5ボギーの出入りの激しい内容ながら首位スタート。第2ラウンドの最終日は18ホール中、パーオンできなかったのは17番のショートだけという圧巻のゴルフとなった。1番で1・5m、3番で2mのバーディーパットを決めて前半のアウトを34。後半のインも15番6m、18番2mを沈めて前半同様34。「危ないパーはなかった」と本人が振り返る。惜しいバーディーチャンスは何度もあったが、この「危ないパーがない」プレーが安定性を物語る。

ドライバーの平均飛距離はキャリーで235ヤード、ランを含めると250ヤード。その上、曲がらない。「線ではなく点を狙って打っている」とベテランウォッチャーが解説する。ブレないドライバーはゴルフを楽しむ。「昨年より全体的にレベルアップしていると思います。今年は日本女子アマで優勝争いもできたし」と自信を持つ。その日本女子アマ（6月）では首位に2打差の2位。4月にはマスターズの舞台で知られる米国・オーガスタナショナルGCでのオーガスタナショナル女子アマにも出場した。「ギャラリーも多くて楽しかった。いい思い出。ありがたい経験です」とナショナルチームの一員として濃い体験を数多くしている。



今年の夏は忙しい。九州ジュニアを制した7月30日の翌日には全米女子アマチュア選手権（8月3～9日・ホーナーズコース＝テネシー州）出場のため日本を飛び立った。この大会は歴史があり、最初の2日間のストロークプレー後、上位64人によるマッチプレーが行われる。準決勝まで18ホール、決勝は36ホール。「マッチはしたことがないので楽しみ。そこに行けるように」。帰国後、JLPGAのNEC軽井沢72（8月14～16日）→日本ジュニア（8月19～21日）→JLPGAのニトリレディス（8月27～30日）のスケジュールが立て込む。「日本ジュニアでは優勝を目指したい」と様々な大会で揉まれながらタイトル奪取に向かう。

初のPO制し初優勝

最終9番で追いつき、同じ ホールでV決めた

《第45回九州ジュニア選手権競技》

女子の部12～14歳

～湯布高原ゴルフクラブ

通算1オーバー 145

川瀬 さくら（志賀中3年）



午前中は苦しみ、午後は最高の気分。初日、3バーディー、2ボギーの71をマークして2位に3打差のアドバンテージを持っていた。ところが、前半のインで貯金を全部吐き出してしまふ。1バーディー、4ボギーの39。同じ最終組で回った加藤りりか（櫛原中2年）が35で、逆に1打のビハインドとなる。アウトに入ると、川瀬には我慢のゴルフが続く。1番から8番までオールパー。そして迎えた最終9番ミドル（372ヤード）は打ち下ろし。残り81ヤードの第2打を左奥5mにつけ、スライスラインのバーディーパットをねじ込んでプレーオフに持ち込んだ。

プレーオフは同じ9番。川瀬はフェアウエーセンターからの第2打を第2ラウンドとほぼ同じ位置につけた。加藤の方が近かったが、なんと3パット。2パットパーの川瀬が勝利を手にする。「プレーオフは初めての経験です。緊張して手が震えました。めっちゃ嬉しいです」と初出場初優勝に言葉を弾ませた。緊張感はあっても9番ホールは相性が良かったのかもしれない。



ゴルフは西戸崎小（福岡市）4年の時、父親の練習について行ったのがきっかけ。小学生の頃はピアノや水泳に励んでおり、ゴルフはそっちのけ。志賀中に入学してから本格的に打ち込むようになる。中2だった昨年、九州沖縄中学校選手権で優勝。ドライバーの平均飛距離は220～230ヤード。「スイングの無駄をなくなるようにした」結果、飛距離は昨年より20ヤード伸びた。好きなタイプの選手は「アイアンのうまい人」。自らは「アイアンはうまくない」という。日本ジュニアももちろん初出場。「1打に集中してプレーしたい。高校でも一生懸命練習して、九州ジュニアで勝ちたい」と14歳の少女は空を見上げた。